

明治初期の腐蝕法による海図銅版作製者[†]

佐藤 敏*

Etching printmakers of the nautical charts in the early days of the Japanese Hydrographic Office

Satoshi SATO*

Abstract

The names of the etching printmakers are found in the early Japanese nautical charts published from 1872 to 1878. Recent investigations on old Japanese charts revealed that 14 etching printmakers created the copper plates of the nautical charts, including MATSUDA Ryuzan, who was the etching printmaker of the first modern Japanese chart.

To print large volumes is one of the requirements of modern nautical charts. This paper described the careers and achievements of these important etching printmakers, in order to promote a deeper understanding of the situation surrounding chart printings in the early days of the Japanese Hydrographic Office.

1 はじめに

1878（明治 11）年までに日本海軍が刊行した海図（以下、海軍海図と記述する）の多くには、測量担当者や製図担当者だけではなく、銅版彫刻者の名前も掲載されている。印刷により大量生産することは近代的海図の条件のひとつにあげられると思うが、その近代的海図の実現に必要なであった明治初期の印刷については、阿部（1961）や海上保安庁水路部（1971）が、水路部沿革史（水路部、1916）の記述をもとに海図銅版彫刻の創始者として松田龍山の名前をあげ、その当時の状況について紹介した記述はわずかで、その他の銅版彫刻者について詳しく記した文章は見当たらない。

明治初期の銅版彫刻について記した論文がない

原因のひとつとして、銅版彫刻者の名前が記載されていた海軍海図の多くを海洋情報部が所蔵しておらず、銅版彫刻者について把握できなかったことがあげられると思う。

近年、日本水路協会（2012）による国内の図書館等が所蔵する古い海軍海図の調査や、2018年の米国議会図書館所蔵海図の調査等により、1878年までに刊行された多くの海軍海図のデジタル画像データが収集され、海軍海図に名前が記載された銅版彫刻者の全貌がほぼ明らかとなった。

その明らかになった銅版彫刻者を Table 1 に示す。1878年までに刊行された海図の図名、刊行年、図に記載された銅版彫刻者、そして名前を確認した図を所蔵する機関を表にしたものである。海洋情報部、国立公文書館、筑波大学図書館、米

[†] Received September 19, 2019; Accepted November 5, 2019

* 海洋情報課 Oceanographic Data and Information Division

Table 1. List of authors for etching prints. Chart number, published year and month, title, name of print maker, and holding organization are shown. “M” on the year numbers denotes the Meiji era. 米：Library of Congress, 公：National Archives, 筑：University of Tsukuba Library, 海：Hydrographic and Oceanographic Department, Japan Coast Guard, 仏：National Library of France.

表 1. 銅版彫刻者一覧。海図番号、刊行年月、図名、彫刻担当者、所蔵機関を示す。年号の M は明治を示す。米：米国会議館図書、公：国立公文書館、筑：筑波大学図書館、海：海上保安庁海洋情報部、仏：フランス国立図書館。

海図番号	発行年月	図名	彫刻担当者	所蔵	海図番号	発行年月	図名	彫刻担当者	所蔵
1	M 5.8	陸中國釜石港之圖	松田保信	米	47	M 9.3	相模國横須賀之圖	松田保信	海
	M 11.11	陸中國釜石港	名なし	海	48	M 7.10	臺灣府屬澎湖諸島	井田道壽	米
2	M 5.9	根室國野附灣之圖	翠山	米	49	M 7.10	清國北直隸海灣圖	松田保信	筑
	M 11.6	根室國野附錨地	西川増之助	海	50	M 7.10	舟山群島諸海峡	西川増之助	公
3	M 5.10	陸中國宮古港之圖	松田保信	米	51	M 7.6	支那海不臘達斬礁脉 福建漳州府銅山港	名なし	米
4	M 5.11	後志國壽都港之圖	松田保信	米	52	M 8.6	陸奧内海青森灣圖	井田道壽	米
5	M 5.11	後志國小樽港之圖	翠山	米	53	M 8.12	藍河之圖第二	松田保信	公
6	M 6.1	渡島國箱館港之圖	名なし	米	54	M 8.2	朝鮮東海岸圖	西川増之助	米
7	M 6.4	伊豆國下田港之圖	名なし	米	55	M 8.12	藍河之圖第一	井田道壽	公
	M 11.11	伊豆國下田港之圖	濱田盛次	海	56	M 8.3	太祖伯德灣	松田保信	筑
8	M 6.1	根室國瑤瑤海門全圖	名なし	米	57	M 8.2	金角港婆衣婆大灣	井田道壽	米
	M 11.7	根室國瑤瑤水道之圖	片江又八	海		M 9.12	金角港婆衣婆大灣	不明	
9	M 6.6	武蔵國東京海灣圖	松田龍山	米	58	M 8.4	大日本海西岸圖	名なし	米
10	M 6.6	津輕海峡之圖	松田龍山	米	59	M 8.12	高麗西岸小稜河之略圖	西川増之助	公
11	M 6.9	伊勢之國磯港之圖	松田龍山	米	60	M 8.3	朝鮮國釜山港	不明	
12	M 7.1	薩摩國山川港之圖	松田龍山	米		M 9.3	朝鮮國釜山港	井田道壽	海
13	M 7.2	臺灣島多口港之圖	井田道壽	米	61	M 7.11	定海港・泉州港	不明	
14	M 7.2	臺灣島噶嘍港之圖	松田龍山	米	62	M 6.9	大島神瀨補測之圖	松田儀平	海
15	M 7.2	臺灣島国姓港之圖	打田霞山	米	63	M 9.10	對馬國嚴原及阿須港	松田儀平	海
16	M 7.2	臺灣島淡水港之圖	名なし	米	64	M 9.7	對馬國網代灣	井田道壽	海
17	M 6.11	八重山全島圖	西川増之助	米	65	M 10.7	清國沿岸諸省圖	高松幸吉	公
18	M 6.8	琉球國運天港之圖	井田道壽	米	66	M 9.12	豐後國佐賀關	西川増之助	海
19	M 7.5	大琉球那覇港之圖	松田龍山	米	67	M 9.10	朝鮮南岬全羅道順天浦略測圖	井田道壽	海
20	M 7.5	根室國根室港之圖	名なし	米	68	M 10.3	伊豫宇和島灣	松田儀平	海
21	M 6.7	朝鮮全圖	井田道壽	米	69	M 9.6	渡島國福島灣	高松幸吉	海
22	M 7.2	清國東海岸廈門港之圖	西川増之助	米	70	M 9.6	陸奧國三厩灣	只木信雅	海
23	M 7.2	八重山島石垣港圖	打田霞山	米	71	M 9.6	朝鮮國西岬濟物浦泊地略測圖	荒川邦政	海
24	M 7.2	琉球群島西部慶良間海峡圖	井田道壽	米	72	M 9.6	五島綱之浦略測圖	濱田盛次	海
25	M 7.3	大隅國口永良部島港圖	西川増之助	米	73	M 9.6	五島若松浦略測圖	野村捨次郎	海
		屋久島一湊之圖			岩本滝之助	海			
26	M 7.3	薩摩國海之圖	松田保信	米	74	M 9.7	朝鮮國巨濟島猪仇味略測圖	佐藤啓治	海
27	M 7.6	釧路國厚岸港之圖	井田道壽	米	75	M 9.6	朝鮮南岸漢江口頂山泊地略測圖	井田鎬一郎	海
28	M 7.3	樺太國楠溪海岸圖	井田道壽	米			朝鮮國巨濟島加背梁略測圖		
29	M 8.11	大島名瀬港圖	井田道壽	海	77	M 9.6	長門國彦島福浦港	片江又八	海
30	M 7.4	臺灣南部之圖	井田道壽	米	78	M 9.12	朝鮮國南岬巨濟島及関山海	井田道壽	海
31	M 7.4	臺灣島清國屬地部	井田道壽	米	79	M 10.3	朝鮮國京畿道月尾島海峡略測圖	西川増之助	海
32	M 7.4	臺灣全島之圖	西川増之助	米			慶尚道海岸圖		
33	M 7.4	車城ノ錨地	松田保信	米	81	M 10.5	陸前國石之巻灣略測圖	濱田盛次	海
34	M 7.6	琉球群島之圖	井田道壽	米	82	M 10.4	伊豆國妻良子浦両嶽圖	松田儀平	海
35	M 7.8	大日本奄美大島海峡西部圖	西川増之助	米	83	M 10.7	太平洋航跡圖	只木信雅	仏
36	M 8.10	陸奧内海安渡灣圖	松田保信	米	84	M 10.3	伊豆國田子及安良里嶽之圖	井田道壽	海
37	M 8.6	陸奧内海野邊地灣	井田道壽	海	85	M 11.5	伊豆國戸田港之圖	松田儀平	海
38	M 8.10	陸奧國大畑浦之圖	西川増之助	米	86	M 10.7	相模國江ノ島錨地	野村捨次郎	海
39	M 7.9	武蔵國横濱灣	井田道壽	米	87	M 10.7	相模國小網代港圖	只木信雅	海
40	M 7.7	登州府福山縣之罟港	井田道壽	筑	88	M 10.6	伊豆國熱海近海圖	井田道壽	海
		萊州府東南岸膠州灣			89	M 10.8	駿河國清水港之圖	松田儀平	海
41	M 7.8	登州府蓬萊嶺正北廟嶋海峡 黃海北西部海洋島錨地	西川増之助	公	91	M 11.5	相模國浦賀港之圖	濱田盛次	海
42	M 7.8	江蘇省東岸洋子江 福建省泉州府圍頭及深滬	井田道壽	米	92	M 10.7	駿河國江之浦灣圖	西川増之助	海
43	M 7.9	福建福州府閩江	西川増之助	米	93	M 11.12	北海道東部	名なし	海
44	M 7.7	浙江寧波府甬江口 江蘇鎮江府吳淞江口	西川増之助	米	94	M 10.10	豐後國猪之串港略測圖	濱田盛次	海
45	M 9.10	奄美大島全圖	西川増之助	海	95	M 11.4	日本海岸全圖	伴幸吉	海
46	M 7.9	廣東廣州府英領香港嶋	井田道壽	米	97	M 11.11	奄美大島燒内灣	不明	

国議会図書館、そしてフランス国立図書館の5機関が所蔵する海軍海図により銅版彫刻者の名前を確認している。彫刻担当者欄に「名なし」と記載しているものは、確認した図に名前が記載されていないものであり、「不明」は該当する図の確認ができなかった、つまり、図が見つからないことを意味する。刊行年月については、中島（1994, 1995）等に拠る。海図番号第61号の図は正式な図名が不明なので、中島（1994）に記載されていた図名を採用している。

本論文は、Table 1の明治初期の銅版彫刻者について述べるとともに、海図の銅版印刷が徐々に軌道に乗っていく経緯を水路部沿革史の記述や国立公文書館アジア歴史資料センターが公開している公文書の記述をもとに紹介するものである。

2 海軍海図の印刷が始まるまで

明治初期の海軍海図は腐蝕銅版画（エッチング）であった。これは銅板を直接彫刻するのではなく、まず銅板に防蝕層をつくりこの層に原図の画線を彫刻したのち腐蝕液を流して凹版を作製するものである。したがって印刷物の出来不出来は銅版彫刻者の技量に左右されるものだった。

日本で初めて独自で腐蝕銅版画を作成したのは司馬江漢とされており、1783年の「三囲景図」が最初の腐蝕銅版画の作品と言われる。西村貞（1941）「日本銅版画志」によると、司馬江漢や亜欧堂田善により大成した江戸の銅版画は、幕末の頃にはその隆盛を失う一方、関西では、初代玄々堂松本保居とその門下、並びにその流系を等しくする銅版作家が多種多様の夥しい数の銅版画を遺しているという。

海図銅版彫刻の創始者である松田龍山の父、初代玄々堂松本保居は、京都で天保年間（1831-1845年）から京阪の名所絵などの多数の銅版画を制作している。保居は1786年に生まれ、六男二女をもうけて1867年に80歳を超えて亡くなったとされている。

松本保居の長男が二代目玄々堂松田緑山（敦朝、儀十郎）である。1837年生まれで、幼年の

頃から銅版彫刻を行い、12, 3歳頃に作成した銅版画が残されている。緑山は号で銅版画の作品等の場合にはこの名前が使われている。敦朝が本名で儀十郎を通称とする文献もあるが、国立公文書館で公開されている公文書にある名前はすべて儀十郎である。父は松本姓であるが、松田姓を名乗っている。龍山も同様に松田姓である。

松田緑山はそれまで名所絵図等に限定されていた腐蝕銅版画の利用を他の実用的な用途に広げた者として知られる。幕末に水戸藩をはじめ多数の藩の藩札の彫刻に係わり、その実績から、1868（明治元）年に明治維新政府の太政官札製造を命じられ、二条城内で彫刻印刷を行い、翌年には東京に出て民部省札の製造を行うようになる。また、日本最初の郵便切手の銅版彫刻も緑山によるものである。

緑山による銅版彫刻印刷では贋札が容易に作られたため、1871（明治4）年以降の紙幣印刷は外国に発注されることになるが、1874（明治7）年10月に大蔵省紙幣寮（現在の国立印刷局）にお役御免にされるまで、緑山は紙幣寮からの発注を受けて証券類等の印刷を行った。

国立公文書館アジア歴史資料センターで公開されている防衛省防衛研究所所蔵文書には、兵部省海軍兵学寮が1871年に玄々堂に印刷を発注していたことを示す文書（例えば、JACAR（アジア歴史資料センター）：レファレンスコードC09090611500）がある。大蔵省から兵部省にあてた文書で、緑山が請負った大蔵省と兵部省から仕事のうち大蔵省の仕事を優先させて欲しいとする申入れ文書である。当時、銅版印刷の仕事を請負うことができる銅版印刷事業者は緑山のほかに無く、緑山に仕事が集中していたと考えられる。水路局についても同年に玄々堂を呼び地図の彫刻について相談する旨の文書（JACAR：C09090585700）が公開されているが、海図印刷の発注までには至らなかったようである。

1872（明治5）年初頭に、海軍兵学寮の岩橋教章と薩摩藩のお雇い絵師であった柳田龍雪の銅版修行のための海外派遣が計画されるが、それは取

りやめとなった（佐藤，2019）。派遣中止の後、岩橋教章はウィーン万国博覧会の随行員となり、そのまま、欧州で銅版印刷を勉強し、帰国後には内務省地理局の地図を製作する。もう一人の柳田龍雪は大蔵省紙幣寮に移る。

銅版修行の海外派遣が取りやめになったため、海軍省は太政官に対して英国人の銅版師、石版師、銅版師を雇うことを希望する（JACAR：C09111029500）が、これも実現しなかった。

一連の文書から、測量成果を海図にして、とにかく印刷を実現させようとしていたことが伺えるが、外注、人材養成、外国人招請のいずれも実行に移すことができず、印刷技術を有する日本人銅版画家の採用が急務となり、10代の青年、松田龍山に海図の銅版印刷が委ねられることになったのであろう。

3 松田龍山

海軍海図第1号の陸中國釜石港之圖の銅版彫刻を行った松田龍山は松本保居の六男二女の末子で1853年生まれである。父保居の生年が正しければ、60代半ばに生まれた子供ということになる。龍山も兄の緑山と同様に幼い頃より銅版画を製作し、多数の銅版名勝絵が残されており、京都の名勝を扱った銅版画としては「洛西梅之宮」，「音羽山清水細図」，「下嵯峨虚空蔵法輪寺」など捨てがたい趣を示していると西村（1941）は評している。

松田は海軍海図に3種類の名前を遺している。第1号の図に記されている「保信」，号である「龍山」，そして「儀平」の3種類である。本名が保信で、儀平を通称とする文献もあるが、国立公文書館が公開している公文書ではすべて「儀平」が使われている。ちなみに、松本（松田）家では代々儀平を名乗っており、父保居は六代目儀平とのことである（西村，1941）。

松田は、兄である二代目玄々堂緑山と一緒に1869年に東京に移ったとする文献もあるが、1872年まで京都で暮らしていたようである。アジア歴史資料センターが公開している明治5

（1872）年9月2日付の海軍省から京都府への通知文書（JACAR：C09110179500）では、京都府下京二十二区八坂郷柝屋町の松田儀平が8月27日に出頭したので採用したとしている。実は、これは2度目の出頭要請に応じたもので、同年4月にも要請が行われており、その際には4月27日付の京都府から海軍省にあてた文書（JACAR：C09110313000）で、病気のために東京には行けない旨が伝えられている。水路部沿革史では松田の採用は明治5年2月の記事として記載されているが、これは間違いであろう。

4月に海軍省への出頭が断られた後、6月に釜石、宮古、寿都の3港の測量図について試験として銅版彫刻を行うことを松田龍山に申し付けるとの文書が残っている（JACAR：C9111107100）。銅版彫刻をさせて、その技術を評価した上で採用することになったものと思われる。

水路部沿革史では海図第1号の釜石の刊行は明治5年8月とされており、松田の出頭後すぐかあるいは出頭前に刊行されたことになり、日本の近代海図第1号は採用試験として彫刻された銅版により印刷が行われたことになる。

Table 2は、海軍海図に記載された銅版彫刻者について、刊行年毎に銅版彫刻を行った図数を表にしたものである。松田龍山は龍山、保信、儀平の3つの名前を使っているので、3つに分けている。また、伴幸吉は、1875年に高松家に養子となり、その当時の海図には高松幸吉と記載されているが、1877（明治10）年に伴家に復籍して伴幸吉となっている（JACAR：09112727700）ので、Table 2では伴幸吉としてまとめている。

1873（明治6）年前半刊行の箱館、下田、瑠璃海門の3図も米国議会図書館所蔵の図には名前が記載されていないが、これらは松田龍山の作と考えて間違いはない。1873年前半に銅版彫刻を行うことができたのは、松田と後述する梅村翠山のふたりしか考えられないが、水深の数字の字体が梅村のものとは異なっており、松田による銅版彫刻だと考えられる。したがって、松田は3つの名前が記載された22図に加えて、1878年までに少

Table 2. Numbers of charts published, categorized by year and by authors of etching prints respectively.

表 2. 銅版彫刻者別、年別の刊行図数.

銅版 彫刻者	松田			翠山	井田道壽	西川増之助	打田霞山	濱田盛次	只木信雅	野村捨次郎	片江又八	伴幸吉	荒川邦政	岩本滝之助	佐藤啓治	井田鎬一郎	名無し	不明
	保信	龍山	儀平															
1872(明治5)年	3			2														
1873(明治6)年		3	1		2	1											3	
1874(明治7)年	3	3			12	8	2										3	1
1875(明治8)年	3				6	3												1
1876(明治9)年	1		1		3	2		1	1	1	1	1	1	1	1	1		1
1877(明治10)年			3		2	2		2	2	1		1	1					
1878(明治11)年			1			1		2			1	1					2	1
計	10	6	6	2	25	17	2	5	3	2	2	3	2	1	1	1	9	4

なくとも 25 図の銅版彫刻を行ったと考えられる。

今井 (2018a) は、第 12 号薩摩國山川港之圖の対景図について製図者である高橋惟熙による西洋の透視画法と日本伝統の画法を融合した素晴らしい出来栄えと絶賛しているが、図は銅版画として表現されているものであり、高橋の能力だけではなく、銅版彫刻者としての松田の優れた技量が発揮されたものである。

1873 年になると、銅版彫刻者として井田道壽と西川増之助の二人が加わる。水路部沿革史には、二人は全く素養がないので、松田龍山が技術指導を行ったと記されている。松田の指導により二人は銅版彫刻者として養成されたのであるが、1876 (明治 9) 年の職員録では井田が十五等出仕であるのに対して、松田は等外一等出仕となっており、技術指導を行った松田のほうが下位の職階となっている。士族と平民の違いがこのような序列となったのかも知れない。

また、水路部沿革史には、「海圖彫刻ノ創始者ニシテ其事業ノ困難ニ耐ヘ幾多ノ苦辛研究ヲナシタルハ他ノ事業ニ譲ラス實ニ今日彫刻進歩ノ基礎ヲナシタルモノニシテ其功績ハ後人ノ宜シク牢記スヘキ所ナリ」と記されているが、在職当時に特に表彰されたような記録もなく、わずか 10 年あまりの在籍で、1883 (明治 16) 年におよそ 30 歳で水路局を辞めている。退職後は自宅で器械器具

類の彫刻に従事し、一時は繁盛したが、晩年は振るわず、1907 年に亡くなったという (西村, 1941)。

斉藤 (1975b) は、初期の海軍海図の 70% の編図を行った大後秀勝が武官や測量に携わった者に比べ出世しなかったことをやりきれない思いがすると記しているが、職種の違いや士族と平民という身分の違いもあるのだろうが、銅版印刷の創始者はその製図担当者よりもさらに遥かに低い評価だったのである。

4 梅村翠山と打田霞山

1872 年刊行の海図第 2 号野附灣と第 5 号小樽港に記載されている「翠山」とは梅村翠山である。梅村は 1840 年に生まれ、翠山は号で、本名を亥之吉という。木村嘉平に師事し版木彫を学ぶ一方で、銅版彫刻の研究を行い、1871 年に慶岸堂の名で独立開業したとされている。1873 年と 1874 年の 2 年間は、松田龍山と同様に紙幣寮から銅版印刷の仕事を請負っている (木村, 1935) が、それ以前に水路寮から海図銅版彫刻の仕事を請負っていたことになる。海軍が小樽港の図の銅版彫刻を発注したことを示す文書は国立公文書館アジア歴史資料センターで公開されている (JACAR: C09111110200)。ただし、その文書には発注先は記載されていない。

東京印刷同業組合（1938）によると、梅村家により1916年に出版された翠山全集の序には「文久の初年西洋木口彫りの木版を彫刻す、是本邦最初のものとなす。同三年徳川将軍上洛の図三種を彫刻し、又明治元年五月彰義隊中の有志の請を容れて銅版の絵入新聞を発行せり、明治四十年東京上野に開催せらせし東京勸業博覧会に海軍水路部出品に係る日本最古の銅版彫刻なる地図一面の如き翠山の手になりしものなり」云々と記載されているという。

1872年には2図の銅版彫刻を請負ったが、翌年になると紙幣寮の仕事で忙しくなり、海図の銅版彫刻を請け負うことは無くなったのではないかと思われる。

打田霞山は梅村翠山の門人で、1873年8月に20歳で銅版師として水路寮に採用されている（JACAR：C09111419100）。霞山は号で本名は新太郎である。海図第23号八重山島石垣港圖など2図に打田霞山の名前が残っているが、それらの図が刊行された頃に水路寮を辞し、銅版修行のため米国サンフランシスコに向かう。

この修行について水路部沿革史には「附屬打田新太郎自費ヲ以テ米國へ銅版術修業ノ儀願出タルヲ以テ附屬ヲ免シ其願ヲ許可ス」と記されている。木村（1935）によると、梅村翠山が事業の拡張に向けて門人の米国での修行を計画したところ、欧米の銅版技術の習得を熱望していた打田がそれに応じたもので、もう1人の門人中山耕山と二人で1874年3月10日に横浜を出港した。ところが、米国に着いて市中の印刷所を訪れると銅版印刷をやっているところはなく、いずれも石版印刷を行っていることがわかった。打田からの米国での石版印刷の隆盛についての報告を受けて、梅村翠山は資金を集めて石版印刷会社「彫刻会社」を東京銀座に設立することにし、打田は石版印刷を行うために翠山の資金で、石版印刷のための資機材を調達するとともに、米国人のポラードとオーストリア人のスモリック（ボヘミア生まれのロシア人とする文献もある）の二人の石版画家を連れて帰国する。

1874年に発足した彫刻会社は、一時は50人の職工を雇うまでに拡大したが、二人の外国人に支払う高給をはじめ印刷材料の海外からの調達費等をまかなうことができず1879年1月に旧加賀藩の資金で設立された国文社に吸収される。翠山の彫刻会社の活動期間は短いものであったが、その後の印刷文化に及ぼした影響は多大なものであり、民間印刷事業発展に貢献した。

ポラードは彫刻会社が吸収される前に、紙幣寮のお雇い外国人キヨソネの描いたシーボルトの肖像画を石版印刷したことがきっかけで、1876年に紙幣寮の石版教師として迎えられるが、1878年にわずか2年で紙幣寮を解雇され帰国する。その後、1881年に中古の印刷機械とともに再来日して、機械を売りさばいた。水路局での雇用を申し入れるが柳橋悦に拒絶される。

スモリックは当時の欧米においてさえ稀だと言われるほど彫刻を巧みにする名工で、彫刻会社が国文社に吸収されると、国文社に移って門人を指導し、その後の石版印刷業界を支える有能な技術者を多数輩出したという。

打田はスモリックから石版印刷について3年間指導を受け彫刻術を修め、優秀な石版画家として認められるようになる。1878年に柳橋悦が欧州の水路業務の視察で各国水路機関が石版印刷を行っていることを知り、水路局は1879年に打田を再び採用する。水路部沿革史に「石版術ハ伊國人ノ傳習ヲ受ケタル者ヲ用ヒタルヲ以テ比較的進歩セリ」とあるように打田は海図の石版印刷の創始者となる。ただし、イタリア人から指導を受けたというのは沿革史の誤りだと思われる。

打田は1915年まで水路部で働いているが、石版印刷の傍ら、絵画や書の作品を残し、大久保利通や岩倉具視らの名刺を書き、木村（1935）は、その技術敏速精緻、真に稀代の工人であると評している。

5 井田道壽、西川増之助、銅版手伝

ここまでで紹介した3名は、号を持ち銅版画家として世間に認められていた者であるが、銅版彫

刻者の名前が記載されている海軍海図のうち、この3名の名が記載されているのは三割に過ぎない。残りの七割は、海軍で学んだ者によって海図銅版彫刻が行われたのである。

1873年刊行海図から井田道壽と西川増之助の二人の名前が現れ、Table 2に示すとおり1874年刊行図では井田は12図に、西川は8図に名前が銅版彫刻者として記されている。1年間で二桁の図に名を残しているのは、この年の井田のみである。

齊藤(1975a)によると井田は大後秀勝の実弟である。1872年に一等測量生として採用され、実習乗船等の記録が残されている(JACAR:C09110159200)が、1873年1月に測量生の中ではひとりだけ銅版彫刻課に配属される(JACAR:C09111382000)。

西川は明治5(1872)年3月に水路局の門番として採用される(JACAR:C09110296200)が、同年8月に門番から異動し(JACAR:C09110171800)、さらに、1873年7月に銅版彫刻課に配属される(JACAR:C09111385800)。

この二人について、水路部沿革史は前述のとおり「此等ハ毫モ素養ナキモノニシテ特ニ松田儀平ヲシテ其技術ヲ教育シ傍ヲ補助セシム」と評している。それぞれ測量生と門番として採用されたのである。銅版彫刻の経験は全くなかったであろう。その全く経験のない2名を松田龍山が指導して、海図銅版彫刻者として養成したのである。

その後、井田は1887(明治20)年に海図銅版印刷の直刻法の創始者として名前が残っており、長く海図印刷に携わったと考えられる。一方、西川は1878年10月に増之助が通称だったので本名の光通に改名する届を提出している(JACAR:C09113128200)が、1879年の職員録には増之助の名も光通の名も無く、1879年には水路局を辞したと思われる。

1876年6月と7月に刊行された海軍海図には、新たな9名の名前が記されている。水路部沿革史には、1874年6月に銅版手伝として10名採用して2年間の修行をさせたことが記載されている。

そのうちの9名の銅版彫刻の作品である。当時、銅版彫刻の人材は民間にも少なく、自前で養成するしかなかったため、銅版手伝の職名で10名を採用し、松田と井田の指導により銅版彫刻者として養成されたと水路部沿革史は記している。また、これら9名による海図については、銅版手伝卒業試験彫刻であり、測量も略測に過ぎないが、朝鮮半島の港など必要とされる図なので、一時の参考用の図であることを注意喚起した上で配布したとも水路部沿革史には記されている。

銅版彫刻担当者が大幅に増加したことにより、海図以外の図面等のコピーの作成も行われるようになったのではないかと想像される。また、9名のうち、濱田盛次、井田鎬一郎、片江又八の3名は伊能図謄写図の作成担当者としても記録されており(今井, 2018b)、印刷以外の仕事にも携わっていたことがわかる。井田鎬一郎は1871年に14歳で水路局に給仕として採用されており(JACAR:C09110327300)、給仕から銅版手伝に異動したものである。その後、石版印刷の担当となり英国海図の複写などを行ったとされている。また、似顔絵に長けており、西郷従道らによる視察があると、その急所を捉えた漫画を描いたとの逸話が残されている(大後, 1943)。

1892年に水路部に採用された山本元吉が「このころの彫刻はもっぱら松田儀平の指導によったものだ」と聞いた(山本, 1951)と記しているように、松田は海図印刷の創始者だけではなく、安定した海図印刷のために多くの銅版彫刻者を養成した指導者としても明治の海図印刷に貢献した者であると言える。

6 銅版彫刻者名の補刻

明治初期の海図には同じ版で印刷された海図でも、英文タイトルがある図と無い図や、銅版彫刻者の名前がある図や無い図など異なる版が存在することが知られている。例えば、第一号海図である陸中國釜石港之圖では、海洋情報部に保管されている銅版原版には英文タイトルがあり、図枠外には松田保信の名があるが、国会図書館や国立公文

書館が保管する図には英文タイトルも銅版彫刻者の名前もない（長谷川，1975）。

他にも、第10号津軽海峡之圖にも同様な異なる図が存在する（師橋，1975）。また、筑波大学がホームページで公開している第4号後志國壽都港之圖には、英文タイトルは記載されているが、銅版彫刻者である松田保信の名前がない。逆に、米国議会図書館が所蔵する第9号武蔵國東京海灣圖には、銅版彫刻者の松田龍山は記載されているが、英文タイトルの“*Tokei Bay*”が記載されていない。このように海図番号が同じ図でも一部の情報が欠けた様々なバージョンの版が明治初期の図には存在する。

Photo 1は、早稲田大学図書館と筑波大学図書館が所蔵する第33号車城ノ錨地である。この図は元駐アモイ米国領事のフランス系米国人ルジャンドル（李仙得）から提供を受けた対景図で台湾出兵のために水路寮で印刷されたもので、1874年5月に日本軍はここから台湾に上陸している。また、図に名が記載されている米国軍人 Douglas Cassel は日本の艦船で台湾出兵に参加している。

早稲田大学の図には図枠外に何も書かれていないが、筑波大学の図には「大日本海軍水路寮 第三拾三号 松田保信鑄」と記載されている。早稲田大学の図は大隈重信の死後に遺族から寄贈されたものであるが、台湾出兵当時、蕃地事務局長官であった大隈には番号の無い図がいち早く届けられたのではなかろうか。一方、筑波大学の図は前身の東京高等師範学校が入手したものと考えられるので、こちらのほうが後で印刷された可能性が高い。

銅版印刷の場合、原版に彫刻されているものを削除することは難しい。したがって、車城ノ錨地以外の図についても英文タイトル等が図中に描かれていない図が先に印刷され、タイトル等が記載されている図は、同じ版に補刻されて後で印刷された図であると考えられる。

松田龍山は3つの名前を使っているが、それぞれの海図の刊行時期を見ると、保信の図は1872年と1874年後半から1875年に多く、龍山が

1873年と1874年前半に限定され、儀平の図はほとんどが1876年以降となっている。しかし、1872年に刊行された3図のうち、釜石と寿都の2図に名前の記載されていない海図が存在することから、松田が採用の試験として銅版彫刻を行った1872年には名前を彫刻しなかった可能性が高い。そうだとすれば、松田は最初に号である龍山を使い、次に保信、最後に公文書で使用される名前の儀平の順で名前を海図銅版に彫刻したのではないかと考えられる。

一方、1872年刊行の残りの2図は外注で梅村翠山が彫刻したもので、後から翠山を追加で彫刻すること考えられず、最初から翠山の名前が入っていたと思われる。梅村は銅版彫刻を請負った業者として名前を入れたに過ぎないが、自らの号を銅版に彫刻したために、それに倣って他の海図についても銅版彫刻者の名前が入るようになったのではなかろうか。ちなみに、米国議会図書館が画像を公開している1855年刊行の英国海図 No.2347 の右下隅に“*J&C Walker Sculp*”と記載されており、英国海図にも銅版を彫刻した業者が記載されていたことがわかる。

そして、最初は号であった名前は、しばらくすると、個人の銅版画作品ではないことを強調するために、測量担当者と同じように本名を海図銅版に彫刻するようになったのではないかと考えられる。

7 おわりに

大蔵省紙幣寮がまだ印刷を外注していた時期に水路寮はいち早く海図印刷の直営化を実現していたと考えられる。しかし、当初、柳橋悦は水路事業の方針策定や測量の組織化に忙しく、製図や印刷に関する一切は大後秀勝に任せていた（大後，1943）とされており、確たる将来構想の下で海図印刷の直営化を選んだのではなく、民間の印刷事業者の対応能力が乏しく、外注では安定した印刷海図の供給が実現できないと考えられ、海図印刷の直営化の道を進むことを余儀なくされたのではないと思われる。

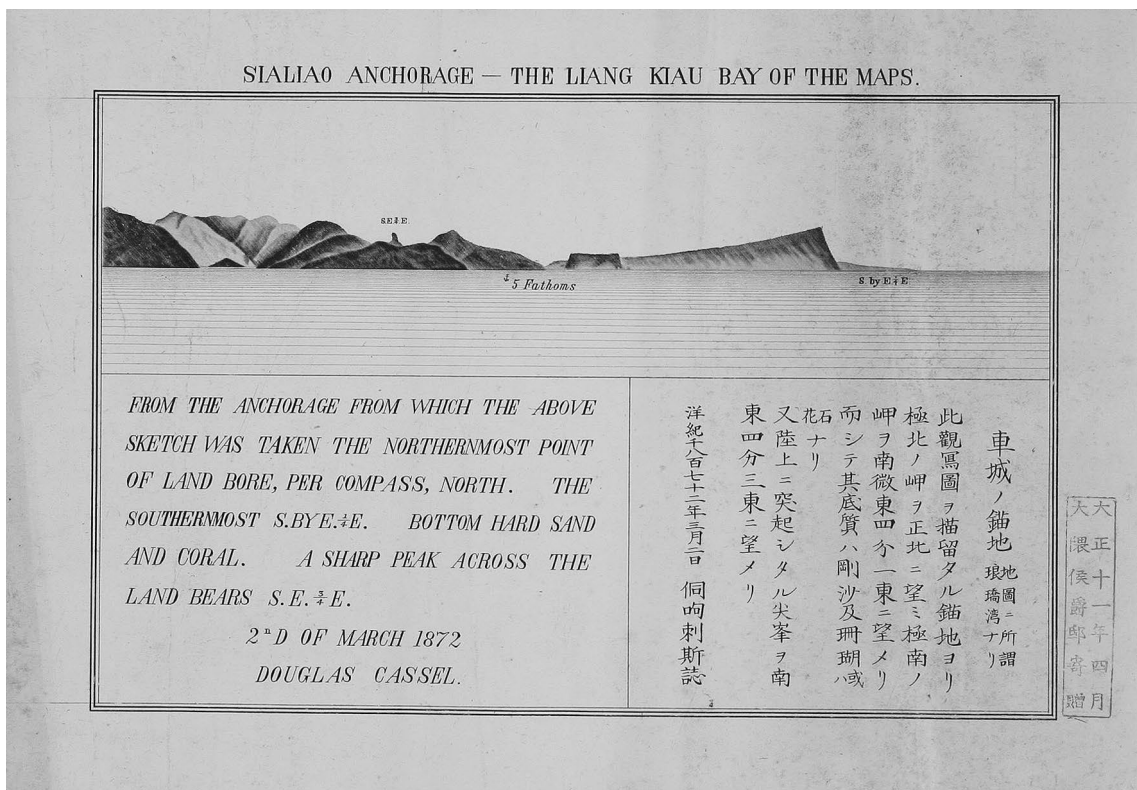


Photo 1a. Chart number 33, Shajo no Byochi (Courtesy of Waseda University Library).

写真 1a. 海図第 33 号車城ノ錨地 (早稲田大学図書館所蔵).

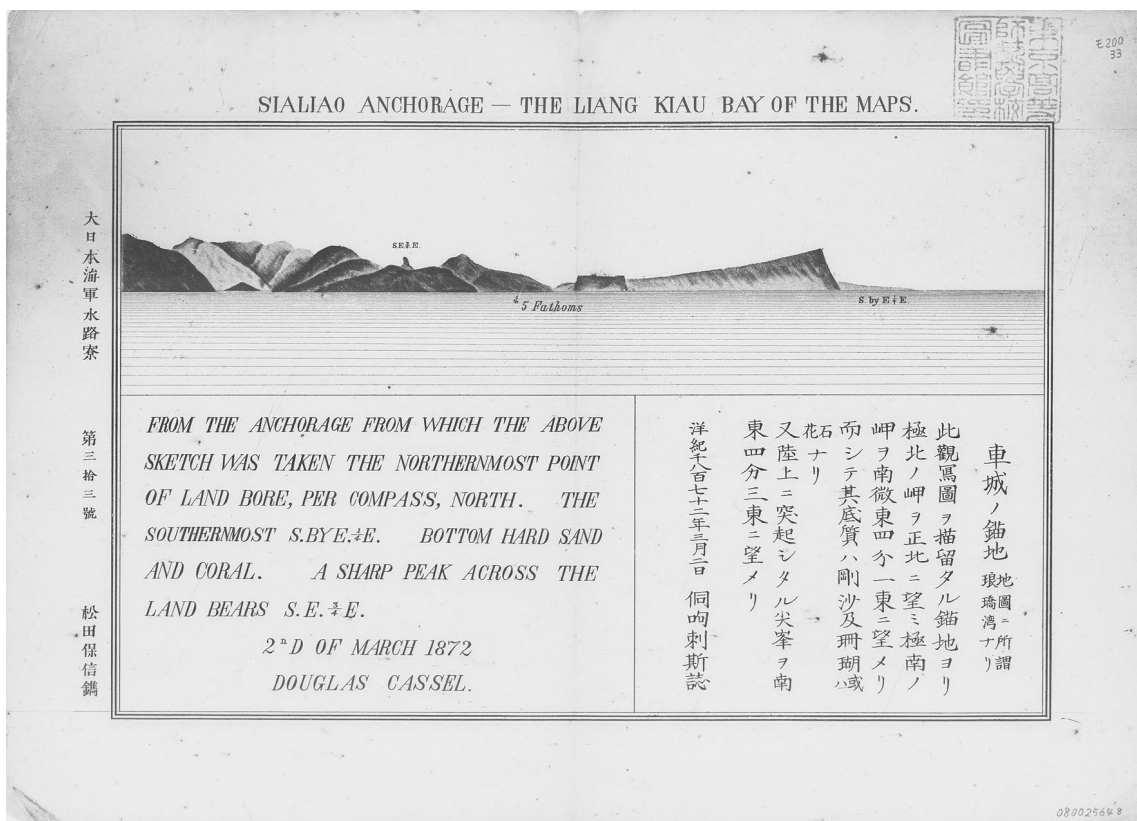


Photo 1b. Chart number 33, Shajo no Byochi (Courtesy of University of Tsukuba Library).

写真 1b. 海図第 33 号車城ノ錨地 (筑波大学図書館所蔵).

本論文では、海軍海図の直営印刷を実現した初期の銅版彫刻者に光をあて、その経歴や素養を記述した。当時の海図印刷の状況の一端が明らかになったのではないかと考える。

謝 辞

本論文は、米国議会図書館所蔵の明治初期の海軍海図の調査により銅版彫刻者が明らかになったことにより作成することができたものである。調査された矢吹哲一朗氏と細川雪氏に感謝の意を表す。

国立公文書館アジア歴史資料センターが公開している防衛研究所所蔵の過去の公文書を多数引用させていただいた。引用文書は本文中でアジア歴史資料センター（JACAR）のレファレンス番号で示した。早稲田大学図書館と筑波大学図書館には所蔵図の画像の掲載を許可していただいた。国立国会図書館では関係する文献の閲覧をさせていただいた。以上の各機関に感謝の意を表す。

最後に、本論文を改善するための有益な指摘をいただいた査読者に感謝の意を表す。

文 献

- 阿部敏夫（1961）海図の製版印刷技術 90 年の歩み，水路要報，67，49-53.
- 大後美保（1943）水路部昔がたり 一大後五郎覚え書より一，海洋の科学，3，6，1-14.
- 長谷川和泉（1975）陸中国釜石港之図について，月刊古地図研究，6，5，2-3.
- 今井健三（2018a）近代的海図を作り上げた明治初期の製図者たち 一その素養と海図作品一，地図情報，38，3，22-26.
- 今井健三（2018b）水路部における伊能図謄写図作成の経緯とその利用，地図，56，1，59-64.
- 海上保安庁水路部（1971）日本水路史，680pp.，日本水路協会，東京.
- 木村嘉次（1935）銅版彫刻師梅村翠山とその彫刻会社，書物展望，5（2），26-36.
- 師橋辰夫（1975）海図第拾号津軽海峡之図，月刊

古地図研究，6，4，10.

中嶋逞（1994）明治期刊行海図の表題の変遷について（その1）（海図番号1～400），水路部技報，12，1-18.

中嶋逞（1995）明治期刊行海図の表題の変遷について（その2 完）（海図番号401～1021），水路部技報，13，1-18.

日本水路協会（2012）海洋の歴史的資料の保存及び公開，128pp.，日本水路協会，東京.

西村貞（1941）日本銅版画志，480pp.，書物展望社，東京.

齊藤敏夫（1975a）大後秀勝の生涯と業績について，月刊古地図研究，6，2，2-4.

齊藤敏夫（1975b）大後秀勝の生涯と業績について（2），月刊古地図研究，6，4，2-10.

佐藤敏（2019）水路寮のお雇い外国人，海洋情報部研究報告，57，1-10.

水路部（1916）水路部沿革史（明治2年一明治18年），465pp.，水路部，東京.

東京印刷同業組合（1938）日本印刷大観，871pp.，東京印刷同業組合，東京.

山本元吉（1951）水路部創立八十周年記念式典手記，pp.266-274，水路部八十年の歴史，水路部創設八十周年記念事業後援会

要 旨

1872年から1878年の間に刊行された海軍海図には銅版彫刻者の名前が記されている。最近の古い海図の調査により、当時の海図が、創始者である松田龍山を含め14名の銅版彫刻者により作成されたことがわかった。

大量印刷は近代的海図の条件のひとつである。本論文では、初期の海図印刷の状況について理解が深まることを期待して、主要な銅版彫刻者の経歴や業績について述べた。